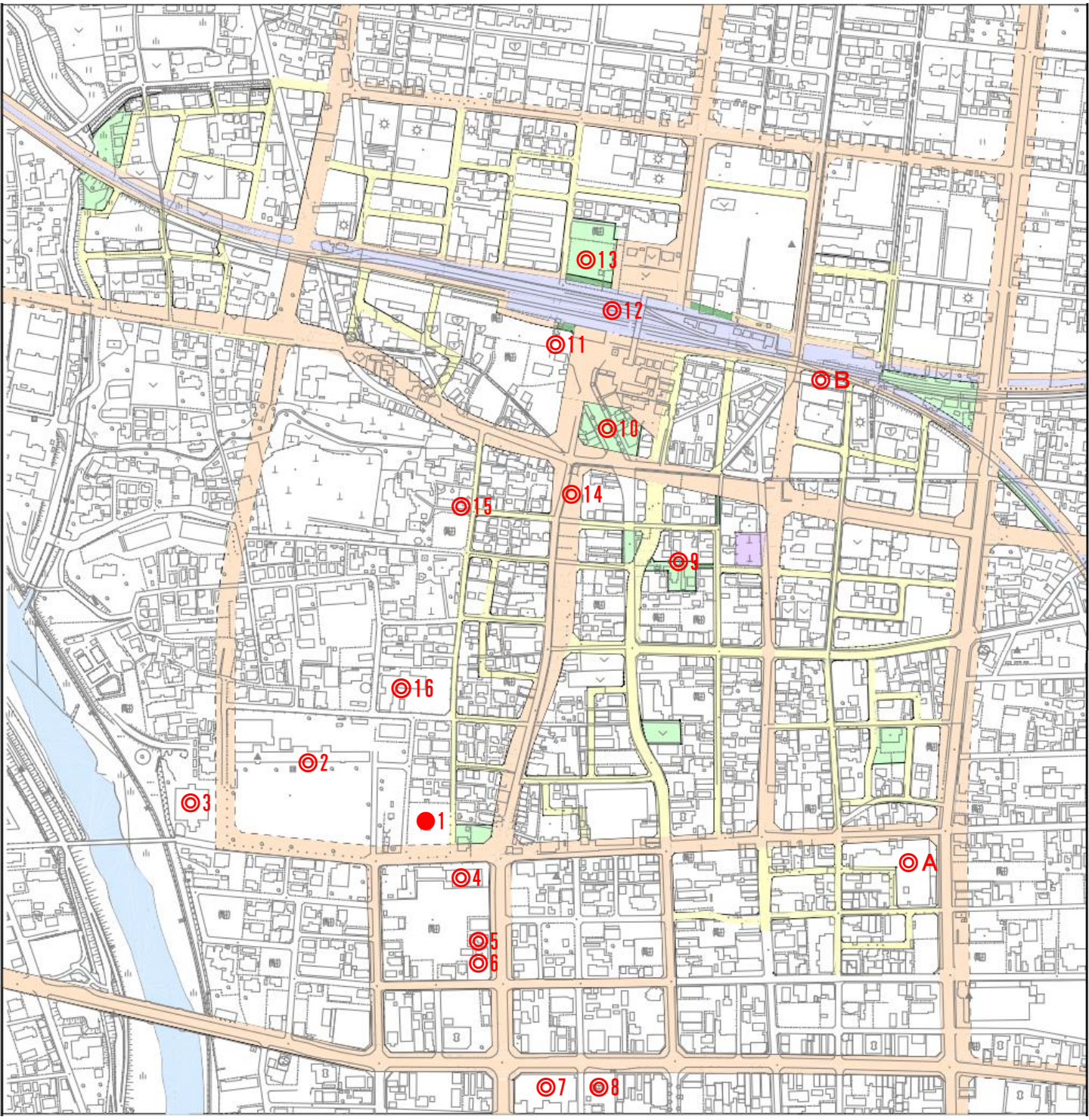
日本建築学会関東支部第 24 回提案競技　「建築・まちづくり提案の部」
現地説明会　資料

日 時：2023 年 7 月 15 日(土) 10:00～16:30 頃
場 所：伊勢崎市地域交流センター赤石楽舎
主 催：日本建築学会関東支部
共 催：伊勢崎市 伊勢崎市教育委員会 日本建築学会関東支部群馬支所

対象地域



本日のスケジュール
- 10:00　開会、オリエンテーション
- 10:15　現地説明開始
- 12:45　現地説明終了、休憩
- 14:00　まちなかシンポジウム開始（赤石楽舎）
- 16:30　まちなかシンポジウム終了
- 18:30　まちなかトークライブ開始（駅前広場）※希望者

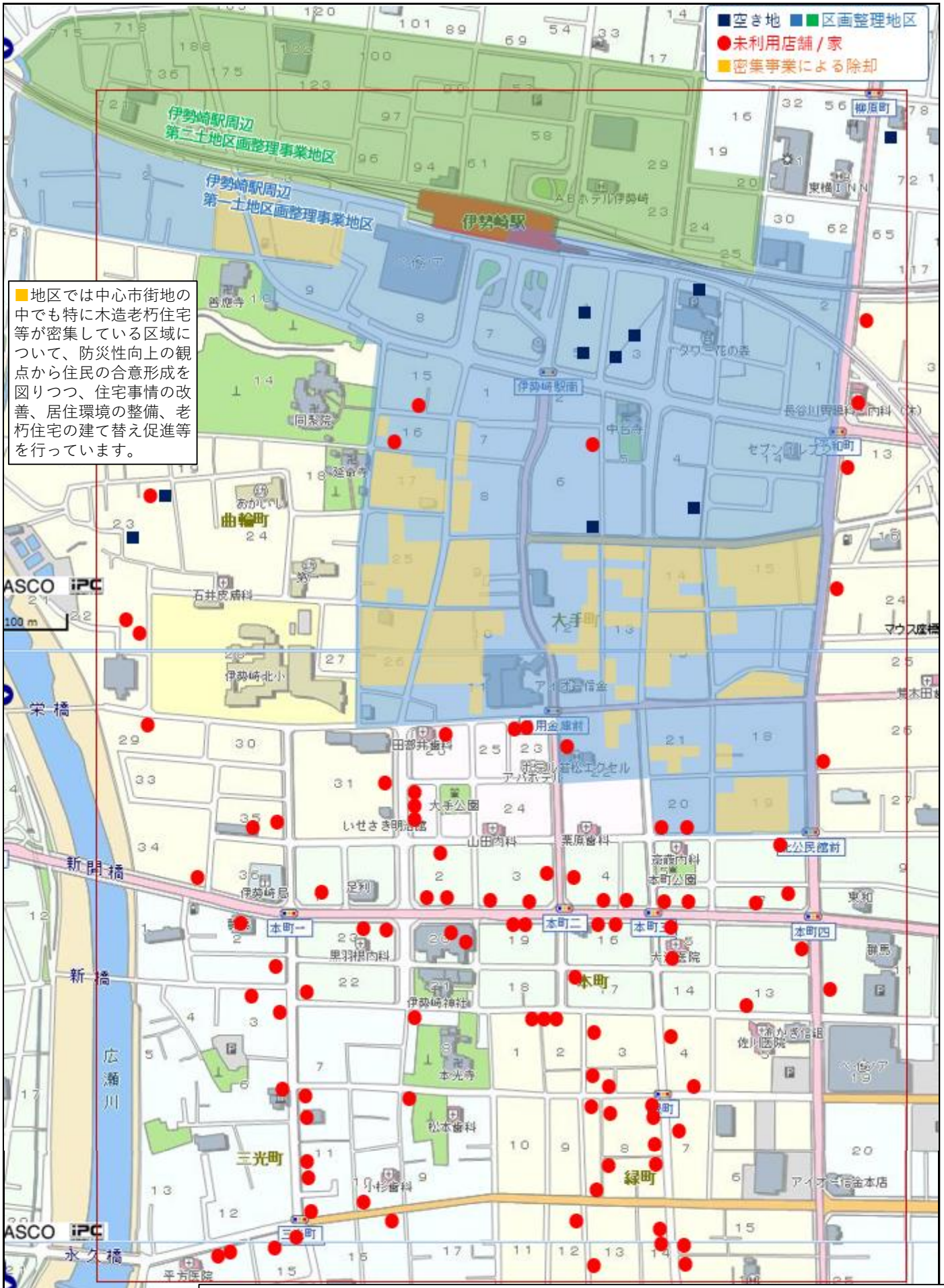
凡　例
都市計画道路等
区画道路
特殊道路
都市高速鉄道
公園

対象地域における公共空間及び建物等

■は市が所有しない物件等

①赤石楽舎 / 旧時報鐘楼 赤石楽舎は地域交流センターとして北小学校内に設置された施設。旧時報鐘楼は横浜の薬種商小林桂助の寄付で大正5年に建てられた、県内最古の鉄筋コンクリート構造物。平成5年に市重要文化財指定。	⑦ＳＯＡビル 1階に茂木園、須田家具店等が入居する複合ビルで、1975年から本町通りを中心として実施された中央土地区画整理事業に併せて建設された。現在は1階に1か所と2～3階数か所で未使用の状態。	⑬駅北口臨時駐車場 公園用地（現状は主にイベント時の臨時駐車場として利用） （敷地面積約1,700㎡）
②北小学校 明治6年に赤石学校として開校。この地域は旧伊勢崎市の中心市街地であるとともに、様々な歴史遺産が数多く残っている地域であり、平成21年4月から特認校として、従来の北小学校区域に加え、市内全域から通学することができる。	⑧本町駐車場 市営駐車場 （敷地面積1,121㎡）	⑭シンボルロード 伊勢崎駅南口と県道2号前橋館林線をつなぐ道路。両側に歩道を備えた最大幅員28メートル（東側舗道は幅員9.5メートル）の道路を整備中。
③伊勢崎市図書館 明治42年12月、当時の伊勢崎尋常小学校長が公開した記念文庫を由来とし、大正10年には伊勢崎図書館として認可、昭和51年には現在の館舎が完成。鉄筋コンクリート造、外壁は磁器質レンガタイル貼。 （敷地面積4,043.48㎡） （建築面積1,127.77㎡） （延床面積2,657.98㎡）	⑨大手町パティオ スペイン語で「中庭」を意味するパティオ。買い物や散策等のついでに気軽に立ち寄れ、様々な楽しみ方ができる“交流広場”となるよう整備された公園。 （敷地面積963.5㎡）	⑮同聚院の武家門 伊勢崎藩主稲垣長茂の屋敷門と伝えられ、門の構造は瓦葺きの切妻造りで本柱4本と控柱4本の四脚門であり、本柱の位置が屋根の棟よりも前にずれる薬医門の形式である。昭和41年に市重要文化財指定。
④伊勢崎織物協同組合 明治13年に伊勢崎太織会社として設立された、伊勢崎市を中心とした地域の機屋及び関連業種による組合で、140年以上継続している。館内では伊勢崎銘仙の展示販売等を行う。現在、にぎわい創出拠点として整備計画を検討中。 （敷地面積7,898.08㎡）	⑩伊勢崎駅南口駅前広場 駅利用者の憩いの広場として利用されるほか、毎月第三土曜日の「いせさき楽市」や冬季の「まちなかイルミネーション」など、各種イベントが開催されている。 （敷地面積2,334.11㎡）	⑯市立第一幼稚園 明治23年に開園した県下で２番目に古い幼稚園。
⑤旧第一生命ビル伊勢崎分室 未利用物件。 （延床面積724.68㎡）	⑪インフォメーションセンター 伊勢崎駅周辺の賑わい創出の拠点として、観光資源などの情報の発信をはじめ、まちなか活性化につながるイベントにも活用できる施設。開館時間は9時～17時。	Ⓐ新保健センター 令和７年４月から供用開始を予定する、３階建て鉄骨造の新保健センター・子育て世代包括支援センター。 （延床面積5,319.24㎡）
⑥いせさき明治館 伊勢崎藩医を務めた今村家が明治45年に建造した県内最古の2階建て洋風医院建築物で、平成14年に市に寄贈され現在地へと曳き家移転された。現在は伊勢崎銘仙展示を行う。 （延床面積154.65㎡）	⑫伊勢崎駅 明治22年にJR両毛線が、同43年に東武線が開設される。平成25年に全ての高架化工事が完了し、新駅舎の共用が開始される。 一日平均乗車数は両毛線で4,920人、東武線で5,612人。（R3年度） 駅自由通路内にはピアノが設置。	Ⓑｉタワー花の森住宅 中心市街地における居住人口の増加や子育て支援機能の充実等を目的として、平成17年に入居を開始した45戸13階建て市営住宅。建物北に隣接する土地は現在供用されていない区画整理事業用地。 （敷地面積約525㎡）

空き地・空き店舗の分布



（実施機関）伊勢崎市産業経済部商工労働課・都市計画部中心市街地整備事務所都市開発課
本調査は目視によるもので空き地及び空き店舗等には未利用の場合を含みます

対象地域の沿革等

この地域は古来、「赤石」と呼ばれていました。その由来は、広瀬川が侵食し、露出した崖の関東ローム層の「赤土」の様子からと言われています。

戦国時代には、この崖の上に砦が築かれ、赤石城と呼ばれていました。永禄8年（1565）由良成繁は、赤石城を再興するため、伊勢神宮に土地を寄進し、城の守護神として城内に伊勢宮が建立されました。これにより、この地域が「伊勢の前」や「伊勢の先」と呼ばれるようになり、「伊勢崎」という地名が生まれました。そして、天正年間（1573～1591）までには赤石城も伊勢前（崎）城と名前を変えています。

慶長6年（1601）の関ヶ原の戦いの後、稲垣長茂が伊勢崎藩主となり、伊勢崎城を藩庁として使用します。ただし、伊勢崎藩は当時1万石の小藩であったため、伊勢崎城は「陣屋」として扱われていました。元和3年（1617）この地域の領主であった酒井忠世が前橋藩主となると、この地域も前橋藩領となりますが、天和元年（1681）に酒井忠寛が前橋藩から2万石を分与され、伊勢崎藩主となります。これにより、幕末まで続く「伊勢崎藩」が誕生します。

明治維新により物資の流通が活発化し、産業や交通など各分野の近代化が急速に進んでいきました。伊勢崎市の中心産業であった織物では、明治13年（1880）に太織会社が設立され、同18年（1885）には伊勢崎織物業組合へ発展改組していき、織物の技術革新に取り組み、大正から昭和初期の隆盛期を迎えることになります。

大正4年（1915）に4代目伊勢崎町長となった石川泰三らによる「大伊勢崎計画」によりこの地域の都市計画は急速に進められ、大正13年（1924）に通称六間道路が完成しています。

昭和20年（1945）8月14日、米軍の空襲を受けた伊勢崎市街地は、広範囲で建物を焼失しました。さらに昭和22年（1947）に来襲したカスリン台風により広瀬川や粕川の堤防が決壊し、市街地は未曾有の洪水に見舞われました。

これらの災禍からの復興に取り組み、昭和30年代からの高度経済成長期に新しい市街地を形成していくことになります。

▲寛政十年伊勢崎町古図
（伊勢崎市図書館所蔵）

まちなか活性化への取り組み

伊勢崎市では、まちなかにおける経済活力の向上を通じた活性化を目的とした「まちなか活性化支援会議」を令和3年度に組織しました。そして、伊勢崎商工会議所、アイオー信用金庫、県内で広くマルシェ等を展開するまきばプロジェクトなどと、まちなかの課題解決に向けた意見交換や事業計画の策定を行っています。毎月第三土曜日には「いせさき楽市」と題した定期マルシェを開催して、まちなかを使うことを実践しています。

また、まちなかのお宝発掘・活用についてのワークショップやまちなかの方向性を考えるシンポジウムなど、様々な事業を行っています。

さらに、「まちなかでやってみたいこと」など聞くための市民アンケートや、主催イベントに来場した子供を対象としたアンケートも実施しました。そしてワークショップ等の意見をふまえ、「まちなかの空き家や空き地を、工夫とアイディアで生まれ変わらせます」や「歩きや自転車の移動が楽しい、人が中心のまちなかを一緒につくります」などの8項目で「まちなか宣言」を策定しました。

本宣言は、まちなかに関わる全ての人が共有していただきたい将来像であり、まちなかの活用にかかる共通の約束事です。詳しくは、伊勢崎市ホームページをご覧ください。

▲会議の詳しい活動はこちらから。